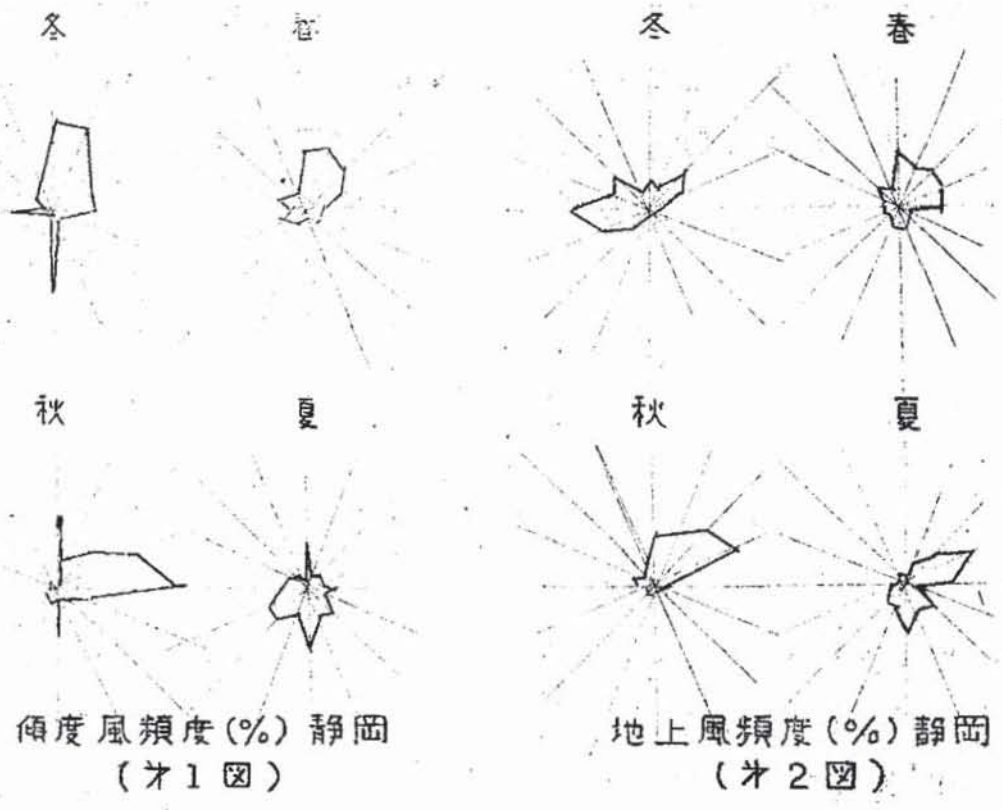


静岡市の地方風に関する一考察

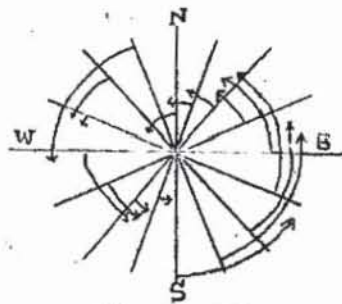
佐々倉航三

静岡市附近の地方風については金原壽郎、宇部慶三郎両氏の調査になる。静岡市内における風向の分布なる報文があり又殆んど同じような目的で調査された藤原滋水氏の「静岡市の風と地形について」なる報告もある。これらは何れも同市附近に比較的多くの観測点を設けて同時観測を実施し主として風向の分布を論じたものである。これらに対して筆者は静岡市内の一定点なる静岡測候所における地上風向と傾度風向との関連を調査したからここにその概略を述べたいと思う。調査資料は昭和24年(1949)一年間における毎日午前9時及午後9時に観測された静岡測候所の地上風向と同時刻における中央气象台発行の天気図によつて静岡を通る等圧線の走向から傾度風向を讀取り兩者を比較統計したのである。オ一図及オニ図は夫々四季に分けてまとめた静岡における傾度風向図と地上風向図で各方向の頻度を各季節における全頻度の100分率で表わしている。地上風向の最多頻度は春はN夏はENE秋はNNE冬はWで一年を通じてはENEが最多となっている。又傾度風向の最多頻度は、春NNE夏はS秋はE冬はNで一年を通じての最多頻度はNである。いま昭和24年における $365 \times 2 = 730$ 回の個々について傾度風向に対する地上風向の偏り角(傾角の余角)を統計した結果(次表)を図示してみるとオ三図の如くなる。

傾度風向	N	NNE	NE	ENE	E	ESE	SE	SSE	
偏角	45.7	33.8°	30.8°	33.3°	56.5°	68.2°	59.4°	78.8°	
傾度風向	S	SSW	SW	WSW	W	WNW	NW	NNW	平均
偏角	61.9	15.8	17.1	36.6	46.6	5.4	24.5	73.4	43.6



これらの結果を熟視すると静岡測候所に於ては ENE~NE、SSW~S 及び WNW~W の風が非常に吹き易いことが窺われる。SE 方向の地上風は吹き難くそれらは多く ENE の風となつて現われるらしいことは



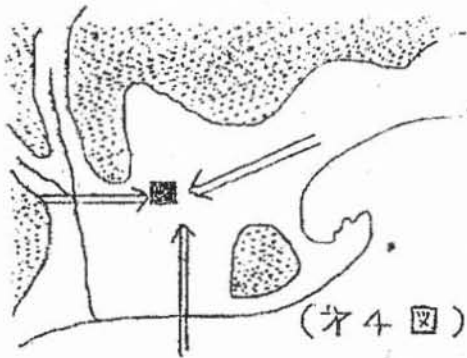
(オ三図)

静岡市の SE 方数軒に位置する有度丘陵 (最高 308 m) の影響であろう。静岡附近の地形を見ると駿河湾頭から薩埴峠に続く山地の南側を通つて清水市を越え、更に有度丘陵の北側を抜けて静岡に達する ENE~NE から SWS~SW に向うルートは風が通り易く、ENE~NE の風は静岡で古来フジカゼ (富士風) として知られているものである。SSW~S の地上風は主として夏の海風である。夏でも前述の理由によつて SE 方向からは吹き難い。W 方向の地上風は冬の主風であり冬の傾度風向の頻度が N~NNE に大きいことから考えると偏り角が可成りに大きくなつており、これは地形の影響が著しいらしいことを示している。

恐らく壽科川の流路に沿つて吹き降りるものか、宇津谷峠の鞍部を抜けて吹き越して来るために静岡では西寄りの風が卓越する結果となるのであろう。(オ四図参照) こゝに注目すべきことがあ

(8)

る。昔には傾度風向の頻度分布と地上風向の頻度分布とがあまり違つておらず、(最多頻度は何れも大体Nになつてゐるのに冬には前述したように傾度風向の最多頻度はWになつてゐるとのう事實である。

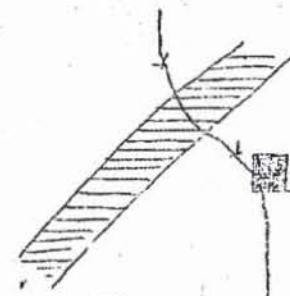


(オ4図)

即ち春・冬とも傾度風向の最多頻度は何れも大体Nであるのに対して地上風向の最多頻度は春はNであるが冬はWとなつてゐる。何故、春と冬とでこのような違いが現れるのであろうか。

等圧線の走向と地上風向とのなす角は直接気圧傾度の大小によつて変つてくるものでないことは理論上明かであるが冬季の気圧傾度が大きければ当然それに伴つて風速も増大するから上層風(地上風に対する意味であつて高層風ではない)が本州中部の高峻な諸山脈を吹き越す場合に於ける風下側の流線は一般に春季よりも冬季に於けるものの方が大きく曲りその結果等圧線も歪んでくるから静岡附近の局部的の等圧線の走向はオ5図のようになり通常天気図に描かれてゐるものとは異つてゐるべきであり天気図上からNと読み取られた冬季の傾度風向は局部的にはNW程度になつてゐるものが多いのではあるまいか。

かく解釈すれば冬季の西風従つて見掛け上偏角が大きくなつてゐることも説明がつくのである。実際には春季と冬季に於けるN方向の上層風速の相違と地形との關係が局部的の気圧配置にどの程度の相異を現わすかを推算する必要があろう。



(オ5図)